

第十一章 幕引き

平成二二年度

三年生 吉岡（喜々津） 福井（大浦） 泉田（式見） 上瀧（有喜）

春休み遠征までは二年生として記載

二年生 岸上藤（小島） 岸上桜（小島） 赤島（式見） 黒田（有喜）

小林（西浦上） 長田（小ヶ倉） 酒井（桜が原） 福井（大島）

春休み遠征までは一年生として記載

一年生 久松（喜々津） 川上（五島の翁頭） 林田（小島）

岩永（長与第二） 中村（西大村） 舩津（片淵）

正月及び春休み合宿までは中学生

平成二〇年度のリクルートはうまくいかず（吉岡以下四名）、次の代の選手（岸上以下の八人）にチームを委ねなければならなくなった。だがリクルート活動終盤になって、吉岡たちの代のリクルートがうまくいかなかったことはそう悲観しなくてもいいと思いはじめた。鶴鳴入学の意思を表明してくれた選手の中で、黒田と岸上藤はジュニアオールスターの県代表候補に挙げられた選手だったし、赤島はこのところずっと欲しかったスリーポイントもジャンプシュートも、彼女にナイスタイミングでパスが廻れば「いただき！」と思わせる選手だった。

ところが事件が起きた。リクルート活動は十一月に入ってから解禁となるが、黒田は鶴鳴入学の意思表示をした直後の十二月に中学の練習で前十字靱帯を切った。となれば、高校入学後の冬休み頃まではまず使えない。これで少し計算が狂ったがそれに追い打ちをかけるような事件がまた起きた。四月になって正式に入学した直後の練習で赤島が前十字靱帯を切ったのである。

しかし、神様は鶴鳴を見放してはいなかった（と思った）。岸上たちが二年生になった秋のリクルートがうまくいったのである。当時の中学生では目玉の二人であった久松（一七〇cmフォワード喜々津中）と川上（一七八cmセンター翁頭中）、それに林田（一五九cmスピードガード小島中）を獲得できたのである。

現有勢力では、チームの軸にしようと思っていた黒田と赤島を欠いて一年間辛抱しなければならなかったが、久松・川上・林田の獲得が決まってからは、黒田と赤島が復活してこの三人が入ってきたらまた長崎のバスケット界を引っ張っていけるチームが作れると思いい、負けが続いても希望を持って指導に取り組むことができた。だが、だが、事はすんなりとは運ばなかった。

平成二二年度には、二年生ながらチームの主力となる選手たち（岸上藤・岸上桜・赤島・黒田・小林・長田・酒井・福井）と、新入生たち（久松・川上・林田）の十一名は過去の鶴鳴の主力選手たちと比べて何等遜色はなく、県内だけでなく九州大会や全国大会に出ても充分戦える素材が揃ったと思っていたのだが、中学時代には見えなかった弱点が次々と現れてきたのである。

例えば、男子高校生並のジャンプシュートを打つ久松。こいつを抑えるヤツは県内にはいないだろうと思っていたが、高校の試合で使い始めると接触プレイに弱いという弱点がすぐに見つかった。ダブルチームに遭うとほとんどボールを失うのである。接触プレイを嫌がる選手はどこにでもいる。それは性格的な要因による場合が多い。久松にもそれはあったがそれ以上に決定的な要因を私は見つけた。それは、久松の体幹支持筋がとてつもなく弱いということだった。

中学レベルの試合ではプレスで来られても彼女の脚力でぶちぎられるし、彼女の男勝りのジャンプシュートが際立って目立っていたので体幹が弱いことなど誰も気付かなかったのである。私もその一人だった。私がそれを発見したのは入学後の彼女のダッシュ時のフォームが気になったのが発端だった。彼女は速攻で走る時にクビが縦揺れするのである。「おかしい」と思って彼女に腹筋運動と背筋運動をやらせてみた。案の定彼女は苦痛に顔を歪め、回数もスピードも運動能力が非常に劣る選手だった。

すばらしい脚力で男勝りのジャンプシュートを打つ選手が腹筋背筋だけは人並み以下だということがあるのか？と思った。久松は小学生の頃からバスケットを続けている。足の筋肉だけを特別に鍛えたわけではな

く、バスケットをしている中で天性の身体的素質が磨かれていった。それは、上半身にも当てはまり、パスやドリブルやシュートをやり続ける中で足の筋肉が発達したのと同じように発達するものだと思うのは当然である。

しかし、その一年後輩の山中がまったく久松と同じタイプだったので「同じ人間の身体で、ある部分は男性並だがある部分は普通人以下ということがあるんだ」と納得した。

これは身体的能力や技術面の分野の一例だが、メンタル面はもつとひどかった。平成十八年頃からずっと続いてきた危機感を払拭すべくこの五年間取り組んできたが、選手たちの周辺で起こる出来事の中で、鶴鳴バスケの終焉が近付いていることを感じさせるものがだんだん増えてきた。

第十一章の冒頭、県総合選手権と地区新人戦の案内文書の中に、私が連載した朝日新聞のコラム、

監督一代『しつけ』山崎純男 朝日新聞一九八五年〇一月二三日（水）

監督一代『上下関係』山崎純男 朝日新聞一九八五年〇二月十三日（水）

を引用して「ここからやり直します。強くなる前に拍手を貰える人間の集団にしなければなりません」と書いた。

この二つは二五年前に書いたもので私の指導理念の根幹を成している。二五年もの時が過ぎれば社会情勢も変わるし若者の気質も変わる。それを承知で私は、「時代が変わっても人間の本質は変わらないはずだ」と思い、自分の指導理念を貫き通して来た。その積み重ねがここ数年、私と選手との間に少しずつれを生じさせてきていたのである。

選手たちは私に反抗したり不満そうな態度を取ったりはしない。むしろ「先生から言われることはもつともだ」と思っている選手の方が多い。しかし、コラムの中で取り上げたタバコをポイ捨てする大人たちと同じように、「わかっている」「ことを」「やる」のはとても難しいことなのだ。

私が、「幕引きが近いな」と実感したのは三年生が引退して二年生と一年生の体制でスタートして間もなく、日曜日の午後の練習を二年生全員がポイコットした時だった。大昔、毎日のように暴力が絶えなかった時代ならポイコットされても当然ということは数え切れないほどあったが、ここにきてポイコットされるということは、私の指導理念そのものがここ数年の選手たちとの間の溝を深めていつている元凶なのだろう。

一 満身創痍

平成二一年一〇月 県下総合選手権 二回戦 スタメン 上瀧 岸上藤 岸上桜 福井つ 酒井

【案内文書】

ウィンターカップ予選で三年生が出場するすべての試合が終了したので、この試合から新チームで臨みます。キャプテンは上瀧です（ジョータキではありません。コータキです）。ニックネームのガラは私が付けたのですが「世界一の瀧はナイアガラだよ」が由来です。ついでに福井つぐみ（一年生）のニックネームの説明をします。彼女は中学二年生の三月、ジュニアオールスター直前に前十字靱帯を切り、中学三年生の一年間リハビリ生活に明け暮れました。前十字靱帯は医学用語でACL（エーシーエル）と言います。福井のニックネームの由来は「二度とACLを切るなよ」という意味でのエースなのです。もちろん、切り札としてのエースになって欲しいというかけこぼれもありますが…

さて、昨日ウィンターカップ予選が終わり、チームに対する感想はその報告書で述べましたので、この案内書では個人的なことを絞って述べます。

このところずっと、練習や練習試合では岸上姉（一年生）岸上妹（一年生）・福井つ（一年生）・酒井（一年生）・長田（一年生）が不動のスタメンでした。が、今回の試合で長田に変わって上瀧（二年生）が頭角を現し、不動のスタメンが入れ替わりました。また、当分出番が回ってこないだろうと思っていた小林（一年生）を一回戦でほんの少しだけ起用しましたが「ひよっとしたら使える時期が早まるかな？」と感じさせ

る動きをしました。

誰の人生にもターニングポイントがあります。この試合がターニングポイントになったのが上瀧と小林です。八月一〇日付けの私のブログに「昨日突然、シマウマを見つけたら突然チーターになってしまふ福井が三本連続危ういプレイを切り抜けました。エ！ウソ！監督の私がかんなセリフを吐いてはいけないと思えますがホントにそう思いました。夢なら醒めないで欲しいと思いましたが」と書いています。それは本当に突然現れました。その後、大変身とはいきませんが、元に戻ることもなくかの彼女はここまで来ています。

ターニングポイントは多くの場合突然現れますから「運」で片付けられてしまふ事があります。しかし、具体的に何もしないで「運」を待ち続けていても何も起こりません。ターニングポイントが訪れる者は具体的に何かを継続してきているはず。今後の長田の巻き返しを見守っていきたいと思います。

【結果報告】

昭和四五年八月の九州中学大会準決勝敗退に始まり今日までに二二回、私の心を苛む出来事として今でも私の脳裏に焼き付いている試合があります。大差で負けたからとか、なすすべなく負けたからとか、負けたことそのものが私を苛む試合はほとんどありません。試合内容が私を苛む試合ばかりです。今日、それに二番目の試合が追加されました。

上瀧が復活したとはいえ一年生が主力のチームですし、相手はおとなのチームですからこちらの幼稚さを衝いてこられるのは計算の内でしたが、あまりにもひどくて…

幼稚さを具体的に挙げれば、

気付きが足りない。

気付いても判断が遅いか判断ができない。

判断できても対応が遅いか対応できない。

という三点に絞られると私は思います。

鶴鳴の一年生がこの三点について特別劣っているというわけではなく、これは日本中の若者に年々加速度を増して広がっている非常に危険な症状です。まずはそれを改善すべく、あの手この手で鶴鳴の一年生を指導してきたつもりですが、まだまだ道は遠いということを思い知らされた試合でした。

ウィンターカップ予選の報告書に「今年のチームはまだまだ未熟だが平成十四年と同時点で一歩リードしている」と書きましたし、「幼稚さは残っているものの、行動や態度に現れたということは心の中にも変化が起きつつあると思うてやりたいのです」とも書きました。その言を翻したりはしません。それは事実だと思っています。ただ、自覚の芽生えを期待していたのが甘かったと気付かされたのがショックで、力が抜けて膝から崩れ落ちそうになる気持ちは四日の夜一〇時三〇分現在でも抜けません。

【戦評】

「…」

文責 山崎 純男

平成二一年一〇月 地区新人戦 三位 スタメン 上瀧 岸上藤 福井つ 酒井 長田

【案内文書】

今日、長崎県総合選手権の二回戦で負け、私自身の心を苛む試合がまたひとつ増えたという報告を書いたばかりなので展望が描けません。

ただ、練習でもっと個人技を磨くとか、走り込みを増やして体力をつけるとか、練習試合を多くして経験を積ませるといふようなことはまったく考えていません。そんなものは、気付きが足りない。気付いても判断が遅いか判断出来ない。判断できても対応が遅いか対応できない、の三点が改善されてはじめて効果を得られると思うので、この三点の改善的を絞ってこれからも指導を続けていきます。

【結果報告】

初日

二試合目。福井つぐみ心ここにあらず。私がそれに気付いたのは後半でした。よく観察してみるとどうやら右足を傷めたらしい。見つからないように振る舞ってはいるが動きがぎこちないのです。心ここにあらずの原因はケガの痛みが理由ではなく、彼女はこれまで何度も大事な遠征前や公式戦中にケガをしてしまい、充分働けなかったことがあるので「またか！」の思いに心を乱されたのだと思います。しかし私は、試合中も試合が終わってからもそのことには一切触れませんでした。

試合が終わって帰る際、福井は親と一緒に帰ったので私のマイクロバスには乗っていません。私は主将の上瀧に「明日エースは試合に出さない。試合前のアップもやらせるな」と言いました。「その理由がわかるか？」と私は上瀧に聞きましたが返事が返ってきません。「分からないなら誰かに聞いてみる」と言ってから後部座席の他の部員たちに行かせましたが、やっぱり誰も分かりません。

私は、福井がケガをしたことを私には内緒にしているのも部員たちに内緒にできるわけがないと思っていました。それが誰にも分からなかったということは私の観察眼が間違っていたのか？それならばいいが、もし足を傷めたのでなかったら福井の「心ここにあらず」の原因は何だったんだらう？

それにしても、彼女たちの試合ぶりは鶴軍団と呼ぶにはほど遠く、まだヒヨコの群です。ヒヨコたちは何かに反応して右往左往するだけ。立ち止まって「何があつたの？」と、状況を見極めようとする子や「こっちの方が正しいだらう」と、みんなと違う動きをする子はヒヨコたちの中にはいません。鶴になって恩返しをして欲しいとは思いますが、早く自分の翼で飛べるようになって欲しいと思います。

最終日

やっぱり福井は負傷していました。太ももの打撲でした。捻挫ではないので長引くことはないでしょう。福井は「大丈夫なので試合に出してください」と申し出てきましたが、「傷めているからではなく、そんな時のお前は集中力を維持できないので少し観ておけ」と言って試合には出しませんでした。安心させるために二試合目だけは出してやりました。

【戦評】

主導権を取っている時だけ自分の持ち味を出せる。それも、意図的な主導権争いはなく、主導権が偶然の出来事で移り変わる。そんな試合だった。若い。

文責 山崎 純男

平成二十一年十一月 県新人戦 四回戦 スタメン 上瀧 岸上藤 福井つ 酒井 長田

【案内文書】

自分の愚かさや弱点に気付いた人間は、自分の奥底を見たことによって翻弄され、一旦ズタズタにされまです。鶴鳴の選手たちは丁度今がその時です。人間みんなそうなのですが、頂点を目指すには一旦自分の奥底を見ることも大切です。それなくして訓練（スポーツだけではなくあらゆること）を重ねても、普通の人間より少し良くなるだけで頂点を極める人間にはなれません。ここで言う頂点とはチャンピオンになるということではなく、何が起きても動じない人間になることを意味しています。

本日県下高校駅伝大会が行われました。今年バスケット部からは二名の参加です。参考までに、平成六年度の一年生の主力選手の十一月頃の五千メートル走の平均タイムを紹介します。工藤二〇分三三秒、大野十九分四〇秒、大滝二〇分二九秒、肘井二〇分四二秒です。今年の一年生の同時期の平均タイムは、岸上藤十九分四九秒、岸上桜十九分五五秒、福井十九分四七秒、長田二〇分五二秒、酒井二〇分五六秒です。

平成六年度その年、バスケット部から四人選び、陸上部から一人選んでチームを編成して出場し、五位入賞を果たしました。そして、駅伝の主力だったバスケット部の一年生が三年生になった時はインターハイで準優勝しました。あの風邪軍団の選手たちです。

今の一年生は、彼女らの同時期と比べたら記録的には勝っています。そして、平成十四年の二年生（翌年が長崎インターハイでその主力になる選手たち）よりもバスケットが分かっていると思います。ですから、今この時期のこの選手たちの出来は「まあ、こんなもんだろ」では済まされません。「お前もつとやれる

はずだ！」とムチを入れなければならぬと思います。

個々の選手に目を向けてみると、長田が練習中によく声を出しているし、気力も少し他の選手より勝っているように見えますが、チームに大変革をもたらすような影響力はまだなさそうです。岸上姉妹は依然としてスランプ状態です。酒井はまだ雲の上を歩いていきます。地上に降りて来てはいけません。小林は試合に出せるようになったのですが、そのことを自分の人生の重大事と本人がまだ感じていないようです。福井のドリブルは入学当初に比べると雲泥の差なのですが、まだ時々チーターに変身する時があります。上瀧は自覚が芽生えてきましたが、まだまだ大人の世界で通用するにはほど遠いところですよ。この子たちをどうやって変身させようかと、考えれば考えるほど私は迷路に迷い込みます。フーツ。

【結果報告】

初日

昨日（金）から岸上姉妹が所属している一年五組はインフルエンザ患者が多数発生したので学級閉鎖になりました。岸上藤はインフルエンザに罹っていて治ったのですが、登校再開直後の学級閉鎖です。岸上桜はインフルエンザではなく普通の風邪ですが、発熱 復帰 発熱の繰り返しで今日はぶっつけ本番です。福井は十一月五日の駅伝大会直後の発熱（インフルエンザではなかった）でしばらく休養させました。小林も福井と同じ状態でしばらく休養です。上村はインフルエンザではなかったのですが昨日発熱で早退し、病院で診察してもらいました。インフルエンザ陰性ではあったものの今日は自宅休養です。そんな状態で大会初日を迎えました。

二日目

今日の初戦の長崎南はなかなかうるさい相手でした。試合の様相からすれば、今の鶴鳴の選手たちでは何か事件が起きればそれがきっかけとなってズルズルッと負けパターンになっても不思議ではない試合でした。それをよく凌ぎました。

ところが二試合目の佐世保南戦で鶴鳴の選手たちはもつとも危惧されていた姿を露呈してしまいました。一試合目と比べ、ノーマークシュートをたくさん落としたりはしたものの、とりたてて「これはまずいぞ！」という場面はなかったのですが、何でもない小さな事件が自分の中でふくらみ、それが疑心暗鬼となって他の選手に次々と感染し、チーム全体に広がって潰れてしまったのです。

いつもの年なら、新入生の疑心暗鬼の伝染は八月下旬には沈静化しているのですが、今年は長引いています。それを私はつい先日まで「何をもちたしているんだお前はあー」と怒りまくっていました。毎日のように選手たちに罵詈雑言を浴びせていました（もつとも、飲み込んだことばの方が多かったのですが）。

しかし今日は「この選手たちがよくぞあの試合（長崎南戦）を凌ぎきったなあ」という思いを大きくズームアップさせ、佐世保南戦の試合ぶりはフェードアウトさせようと思います。

【戦評 佐世保南戦】

鶴鳴の「よくもまあこんなにたくさんノーマークシュートを落とせるもんだ」というプレイと、佐世保南の四番と十五番の「よくもまあこんなに打てるもんだ」というアウトサイドシュートが目立った。しかし、勝負の結果はそれが原因ではなく、鶴鳴の足が第二ピリオドあたりからピタッと止まったことだろう。その原因は、体力的なものではなく心理的なものだと思う。

文責 山崎 純男

【遠征合宿】於 九州女子

平成二二年〇一月〇三日～〇六日 対戦 九州女子・神村学園・宇部慶進・徳島城北・札幌創成

倉敷翠松・佐賀清和

試合数 二二本（二〇分×二二）

勝敗 三勝十九敗

出場時間 長田 二〇一分・酒井 六九分・福井 四四〇分

黒田 三八七分

久松(中) 四〇〇分・川上(中) 三七八分

林田(中) 二三九分・川口(中二) 八六分

コメント

来春鶴鳴入学が決まった中学生の中には保険に加入してこの合宿に参加する選手が毎年居るが、川口はまだ中学二年生である。こんなことは私のコーチ人生でも珍しい。川口は一七七cmの長身だが、姉も一七五cmの長身選手だった。姉は鶴鳴卒業後自力で国立富山大学に進学した秀才である。姉が鶴鳴に入学した時妹はまだ小学生五年生だったが、その頃すでに「私も鶴鳴に行く」と決めていたそうである。

川口のリクルートには裏話がある。川口姉妹の母親は、純心の第一期黄金時代センターだった。私は川口姉が市内の強豪チームでプレイしていることを知っていたし、そのチームの試合も数回見た。しかし、母親が純心卒業なのでその娘は当然純心に行くものだと思っただけでリクルート活動をしなかった。

ところが、川口家では「山崎先生から声がかからない」ということは自分(自分の娘)にそれだけの資質がないからだろう。それならば学業特待で鶴鳴に行つてバスケットをする」と言つてるといふ情報を得た。私はその情報を得てすぐ母親に電話をした。

山崎「学業特待で鶴鳴に来るっていうことを聞いたがそれは本当か？」

母親「そうですよ。声がかからないのならそうするしかないでしょ」

山崎「いやいや声をかけないのではなく、お前は純心の黒柱だっただろ？純心の黒柱のこどもを鶴鳴に貰えるとは誰だつて思わないよ」

母親「私は私、重要なのはこどもがどうしたいかですから」

山崎「……」

というわけで、川口姉の獲得は決まった。と同時に、まだ四年先の話になるが妹も大事件が起きない限り獲得できたも同然となった。後日談がある。妹は父母に連れられて姉の試合をよく観に来た。会場で会う度に私は「お前、また大きくなったなあ」と言う。すると母親は「そうなんですよ、朝起きてきたら昨夜より大きくなったんじゃない？と思うことが時々あるんですよ」と言った。

選手の出場時間を見ると、黒田が三八七分でようやく戦列に名を連ねるようになった。彼女は中学三年の十二月に前十字靱帯を切つたので、一年一ヶ月ぶりの復帰だ。ちょっと時間がかかった。リハビリがうまくいかなかったのだ。赤島は黒田より四ヶ月遅れで前十字靱帯を切つたので、この合宿までは用心して使わなかった。岸上姉妹は名前を連ねていない。二人とも継続するか退部するかでいろいろ悩んでいたのである。

この合宿でわかつたこと

三月以降は、黒田と川上を同時に使わなければならないので、従来の四アウトインのモーションオフエンスを、三アウトインのパターンオフエンスに切り替えた方がよい。

ディフェンスは、黒田・川上の負担を軽くするため、当面はゾーンディフェンスを採用した方がよい。それも、一三一のアグレッシブトラップディフェンスがよい。

前述の を有効にするには、久松・林田・長田・岸上姉妹・酒井のスリーポイントシユートの確率を上げなければならない。赤島は元々スリーポイントは入るので、復帰後はドライブの力強さを身に付けさせればよい。 で、九月のウィンターカップ予選をモノにしたい。

平成二二年〇一月 九州春季二次予選 一回戦 スタメン 岸上藤 福井つ 酒井 長田 黒田

【案内文書】

中学三年生の最後の地区別対抗戦で前十字靱帯を切り、十二月上旬に靱帯再建術をしてから約一年間、ずっとリハビリを続けてきた黒田が十二月上旬からチーム練習に参加し始めました。この試合は彼女のデビュー戦です。この一ヶ月は、チーム練習を彼女の復帰に焦点を絞り、彼女に合わせてやってきました。

毎年正月は福岡の九州女子高校に集まって強化合宿をします。メンバーは札幌創成・徳島城北・倉敷翠松・慶進・佐賀清和・慶誠・神村学園・九州女子といった常連校です。

この合宿では黒田をどこまで使えるか不安でした。というのは、練習を開始して一〇日も経たないうちに「ふとももがピリツとして痛くなりました」と言うのです。「筋断裂だ」と私は思いました。筋断裂の治療は時間がかかります。私は正月合宿で黒田を起用するのは無理だと思い、目の前が暗くなりました。そんな暗い気分が昨年末に神村学園を招待して合宿をしましたが、黒田は少しではあります。試合に出せたのです。多分筋断裂は軽かったのでしょう。というわけで正月合宿はまた希望が湧いてきました。

正月合宿は二〇分の試合を二二回やりました。フルタイム出場すれば四四〇分になります。それは福井です。次いで多かったのが黒田の三八七分でした（久松の四〇〇分はまだ中学生なのでカウントしません）。初日は用心してちょこちょこ交替させながら起用しましたが、大丈夫みたいだったのでよほど疲れた様子が見えない限り交替はさせませんでした。一年間チーム練習に参加していなくて十二月上旬にやっと合流した黒田がここまで使えるとは思っていませんでした。正月合宿はとて充実したものになりました。

この一年、主力が定着しませんでした。この正月合宿ではつきりしたことは、一年訓練しても玉際の弱さと場面理解の稚拙さが改善されない選手は使えないと言うことです。エントリーされた十五名の選手たちは、今春入学してくる新入生に「上級生はここが違うよなあ」と思わせられる試合ができるかどうか。そのことに対する上級生の思いを観察したいと思います。

【結果報告】

初戦で長崎西に負けました。これは、現在の鶴鳴の力からして予想できたこととどうということはありません。問題は試合内容です。結論を述べます。十一月の県新人戦の戦い振りからすれば雲泥の差で今回が優っています。第三者から見れば「こんなにミスが多い試合なのにどこが雲泥の差なの？」という試合だったかもしれません。ヨシとする基準は私と選手の間でした。分からないでしょう。

知的理解力・判断力・決断力・自己分析力・闘争心・勇気・落ち着き・粘り等々、行動の源となる資質が磨かれていない故に、小さな事件に翻弄されて取り乱す選手ばかりなのですが、今日の試合では「さあ、こころへんでお前の本性が暴露されるぞ」という崖っぷちに何度も断たされたにもかかわらず、向こう側に落ちずに試合終了までこちら側にしがみついていたから「雲泥の差」なのです。

そのような心理的なことは第三者にはなかなか見えにくいものですが、それがはつきり見えたプレイをひとつ紹介します。それは福井の六本連続フリースロー成功です。カッと化した自分を抑えることができない彼女は、フリースローのような動から静に移った時の集中力と落ち着きを保てません。ですからこれまでのフリースローはことごとく落としてきました。私は福井の目付きや小さな動作から彼女の心理状態を探りましたが、今日の彼女の三回のフリースロー時の集中力は気まぐれではありません。明日はまたブレるかも知れませんが成長とはそうしたもので、今日できたので明日からずっと出来るとはかぎりません。しかし、今日のそれがまぐれではないのならば、いつかそれが定着するでしょう。

個人的なことをもう一つ。昨年十二月からずっと、前十字靭帯再建術後の黒田の公式戦デビューに合わせチーム練習をやってきましたが、プレイタイムを見てもおわかりのように彼女はフル出場です。これも重大事件です。これらの出来事を基に、自信を取り戻した顔で新入生を迎え入れられる上級生になって欲しいと思います。

【戦評】

長崎西は、体格・足・シュートともにバランスが取れている。難があるとすればポイントガードらしき選手がいけないということだが、それとて周りの選手の力で補って県内では充分。現在県内では最も力が安定しているだろう。

鶴鳴は若さ暴露の連発で安定した試合ができない。だから、一気に離される場面がある。しかし、リズムをつかめば一気に追いつく場面も時々ある。

両者についての興味は、長崎西がこれで九州突破を狙えるか(狙う気概があるか)。狙うにはガード陣の弱さ対策をどうするかだ。鶴鳴は来年も再来年もこのメンバーで行くのだが、いつ若さ暴露を解消するのかである。再来年では間に合わない。

文責 山崎 純男

【遠征合宿】於 JOMO

平成二二年〇三月二八日～三〇日 対戦 山形商業・麗澤高校・徳島城北・札幌創成・神村学園

昭和学院

試合数 十〇本(二〇分×一〇)

勝敗 三勝七敗

出場時間 上灌 十一分・赤島 十八分・岸上藤 三〇分

酒井 三分・福井 一八八分・黒田 一七七分

小林 二分・久松(中) 一七一分

川上(中) 一八四分・林田(中) 一六三分

【遠征合宿】於 徳島城北

平成二二年〇四月〇一日～〇二日 対戦 徳島城北・広島皆実・福井商業・香川英明・倉敷翠松

試合数 七本(二〇分×七)

勝敗 二勝五敗

出場時間 上灌 〇分・赤島 五四分・岸上藤 十一分

酒井 六八分・福井 一三四分・黒田 〇分

小林 一二七分・久松(中) 一二五分

川上(中) 一四〇分・林田(中) 四一分

コメント(JOMO&徳島)

正月合宿では、

黒田と川上を同時に使わなければならないので三アウトニインにするとしたが、またそれを訂正して黒田と川上は同時に使わず、ワンセンターがよいと分かった。

スリーポイントシューターが必ず必要。

センターのボールマンスクリーンは多用した方がよい。

ディフェンスは、当面はゾーンディフェンスを採用する。 1 3 1、1 1 3、3 2のアグレッシ

ブディフェンス。これで、九月のウィンターカップ予選に臨みたい。

平成二二年〇四月 県下春季選手権 三位 スタメン 福井 赤島 黒田 林田 川上

【案内文書】

昨年のこの大会は、「十五人エントリーできる試合で、誰を落として誰を入れようかと悩んだことはありません」と書きました。が、一年経った今「誰を選んで同じだ」という気持ちに変わっています。期待していたのに伸びなかったり、ケガからの復帰が遅れたり、ケガの連発で充分練習できなかったり等の理由によるものです。

ですから今年は、新入生の三人をスタメンに起用して再構築しなければなりません。春休みの遠征前は、オフENSはツーセンターでエントリーポジションは一 四から入り、ディフェンスは新入生が多いのでゾーンを三種類使う、という方針で臨みました。それでJOMO合宿の初日はうまく行きました。

しかし舞台を徳島に移すと、疲労が重なったこともありませんが、一 四では動きが滞ることと、スリーポイントが打ててリズムがよければ入るといふ選手を作ってそれをスタメンで起用しなければ難しい試合は制することができないということがわかりました。構想を練り直し、いろいろ考えていると遠征最終日の夜はほ

とんど眠れず試合展開のシミュレーションを描いては消し描いては消して夜が明けました。

それは長崎に帰り着いてからも続いています。ワンセンタールにして、スリーポイントが打てる選手をフォワードに一人起用して…という前述の構想は変わらないのですが、ボール運びを誰にやらせる？それに協力させる選手をどうする？などなど、役を演じる選手の顔とそれに伴う動きがあれこれ浮かんでくるもの。決定的な方策がイメージの中で定まらないのです。

と、こう書けば先が見えなくて悩んでいると思われるかもしれませんがそうではありません。浮かんでくる構想が「いやいやこれではだめだ」という否定的なものではなく、「それならこれはどうだ？」「いやいやそれよりこっちの方がいい」と、前へ進む構想なのです。

そんなこんなで、日によっては私の構想の中のプレイの良否を確かめるために二対二の練習だけを二時間半続けたり、身体の動かし方（姿勢保持や重心移動や腕振り）だけで二時間越えたりすることがザラです。そういう状態ですから今やっていることが試合に反映されるようになるのはまだまだ先になると思います。が、足踏みせずに前へ進んでいることだけは確かです。結果を焦らず、長い目で見守ってください。

【結果報告】

初日

昨年この大会は下級生中心でした。それは今年も同じです。この二年、中間管理職不在だったツケは大きく、全てをゼロから積み上げています。昨年この大会のコメントに「プレイというのは『やる』だけではダメで、『やめる』『強引にやってしまう』『それ以上無理しない』『そこまでやってしまったなら無理矢理続ける』『タイミングを変える』『距離を測る』『逃げる』等々を理解した上で『やる』のが重要です。これらのことをこれから繰り返し繰り返し教え込んでいこうと思います」と述べていますが、それは今年も継続中です。

まる一年、同じことを教え続けているわけです。ではこの一年停滞しているのかと言えばそうではありません。コーチとして教え続けたことが、選手として少しはわかりかけてきたことが、コート上で形になって現れるようになるまでにはそれほど年月がかかるということなのです。

二日目

純心戦は選手交代をさせたりベンチからの声かけて試合運びの指示は出しましたが、大接戦にもかかわらず私が取ったタイムアウトは四ピリの一回だけでした。今の段階で私があの手この手使って勝っても、それは私の手柄であって選手の手柄にはならないと思ったからです。よく凌いでくれました。アッパレです。

しかし、試合終了後すぐ長崎に帰って練習しました。心技体ともに未熟さ満載での四強進出だったので、久々の四強進出で有頂天になることなく、未熟な部分を再認識し、本当に四強にふさわしいチームになるための課題を確認させる練習でした（大昔のように、報復やしこきはやりません。念のため）。

最終日

熊谷繁子（鶴鳴 全日本）、原田五月（鶴鳴 全日本）、浜口典子（鶴鳴 全日本）は高校生の頃、自分が有名であることの重圧に苦しみました。久松なつきもこれから彼女たちと同じ思いを味わっていくことになると思います。しかも、みんなが注目しているデビュー戦は捻挫で欠場。その中心いかばかりか…。他の選手諸君わかりますか？主役であり続けることの苦しさ。それが本当にわかってやれた時、君も成長してよ。

【戦評】

長崎西は強い。しかも選手層が厚い。その長崎西に、長崎商業、長崎女子、佐世保南、純心、明誠、西海学園等があと二ヶ月でどこまで迫るか…

今首位を走っている長崎西だけでなく、それを追っかける他のチームの意気込みが四年後の長崎国体の行方を決めると思う。三年後では間に合わない。今コートにいる選手たちがその意識を持って取り組むことが重要だ。

ところで、いやなものを覚えてしまった。ハーフタイムには次の試合のチームが練習してもよいことになっているが、シューティングをしていた某チームの選手（大会何日目か、男子か女子かは伏せておく）が、リングから跳ね返ってきたボールをショートバウンドさせて足でポンと蹴って仲間にトスした。長崎国体を成功させるためには、こんな光景に鈍感なコーチをコートから排除したい。チームを強くするとかなんとかいう以前の問題だ。

文責 山崎 純男

【遠征合宿】於 倉敷翠松

平成二二年〇五月〇一日～〇四日 対戦 倉敷翠松・徳島城北・福井商業・熊本慶誠・夙川学院

福井商業

試合数 十八本（二〇分×十八）

勝 敗 二勝十六敗

出場時間 岸上藤 九八分・赤島 二七二分・酒井 二三九分

福井 三一七分・黒田 二四四分・久松 〇分

川上 三五二分・林田 二七八分

【バルーンカップ】於 佐賀致遠館

平成二二年〇五月〇八日～〇九日 対戦 佐賀清和・鹿児島・致遠館・佐賀東

試合数 四本（フルゲーム×四）

勝 敗 二勝二敗

出場時間 岸上藤 二三分・赤島 一三六分・酒井 四六分

福井 一二九分・黒田 一〇二分・久松 二二分

川上 一三五分・林田 一二七分

コメント（倉敷&佐賀）

倉敷カップ

川上への裏パスプレイを使えるようにしなければならない。

川上の棒立ちプレイをなくし、踏み込みジャンプを身につけさせなければならない。

林田と久松のディフェンスの目は徹底改善しなければならない。

やっぱり黒田・川上を 二枚同時に使おうかなあ

バルーンカップ

初日

スタメン決めが難しい。

点を取るためのプレイの構築が難しい。

二日目

一年生（久松・川上・林田）に、場面のイメージをインプットさせるのが大変だ。叱ってはダメ。情報を与え過ぎてもダメ。急いでもダメ。ハアア。こっちが窒息しそう。

久松う。もうケガするなよ。未熟者が多くても、ミスは多くても、たとえ負けても、そろそろ気持ち

ちスツキリの試合をしたいぞ。あ

平成二二年〇六月 県下高校総体 四位 スタメン 岸上藤 福井 黒田 久松 川上

【案内文書】

四月中旬の県下春季選手権のあと、五月上旬の連休（一～四）に恒例の倉敷カップに参加しました。続く八日と九日の両日は、これも毎年恒例の佐賀バルーンカップに参加しました。どれも、新戦力の久松・川上・林田に経験を積ませるのが最大の目的でしたが、ご存知のとおり最も経験を積ませなければならない久松は

春季選手権の準決勝で右足首の内外両側を捻挫してしまい、両遠征ともに使わず仕舞い。

また、林田は両遠征ともに使えたものの、久松が復帰して高校総体に向けての本格的な練習を開始した直後（五月十四日）に右足首を捻挫。二年生では、黒田が少しづつ使えるようになったと思ったら今度は貧血発覚（ヘモグロビン八・〇）。福井（つ）は五月十七日のグラウンドトレーニング中に太ももの肉離れ。というわけで、なかなか「みんな元気だ頑張るぞお！」とはならず、歯がゆい思いをする日が続いています。そんな中で、ビクビクしながら春季選手権戦から使い始めた赤島が定着してきたのは救いです。

ただひとり、四月からずっと休まず働いてくれている川上には、仕込みたいことはたくさんありますが二ヶ月かかってひとつ、練習した技を試合で使えるようになってくれればいいと思っただけで急がず焦らず教えています。今回はそのうちのひとつである裏技（何を教えたか思い出せない）が試合で数回成功すればいいかなと思っと思っています。

三年生の上瀧が突然スタメンに躍り出てきましたが、林田が捻挫したからではなく、林田が元気であってもこうなったと思います。高校総体は素質や技術ではなく人生経験が豊富でなければ乗り切れません。上瀧は遣り過ぎミスや思いこ込みミスが多い選手ですが、それを差し引いても林田にはまだ無理だろうと思われ一瞬の対応力を見せることがあります。久松も林田も想定外の事件にはまだ対応できません。素質を買われてスタメンに起用されてはいるものの、入学後まだ一回も四〇分通して安定した仕事をした経験がない久松は、今度の高校総体で自分の甘さを思い知らされることになるでしょう。

そんなこんなをすべて抱え込んで、選手達が明日への手応えを感じ取るような試合を創ってやるのが今回の私の役目だと思っています。

追伸 後藤由佳存命ならば彼女にとっての最後の高校総体になります。追悼パフォーマンスは一切しませんが、ベンチに座っているはずの彼女によりプレゼントができる試合にしたいと思っています。

【結果報告】

六月四日（金）母永眠二三時三四分（第一章で詳細説明済み）

六月五日（土）通夜十九時〇〇分

六月六日（日）葬儀十三時〇〇分

というわけで、初日と二日目は短大の板倉氏と三根氏に、選手送迎およびベンチ采配を頼みました。よって試合の様相はわかりません。明日三日目も、一戦目は私がベンチ采配をできませんが三日参りでお寺に行かなければならないので午後の試合はまた三根氏に頼むこととなります。ご迷惑をおかけします。

六月七日（月）三日参り十三時〇〇分

一戦目の長崎商業戦は「ホホー、ここまでよじ登って来たか」という試合ができたと思います。ですが、注意力を維持できないし判断力が備わっていない選手ばかりなので、私が選手の表情や動きをしつかり観察しながらボ口が出ないうちに早めに交代させるなどの処置をしなければ、まだ自力で難局を切り抜けることはできません。

要するに、まだ私の手のひらでしか試合ができないのです。第四ピリオドは、私の手のひらから落っこちた選手が一人いたので勝ちを逃してしまいました。毎日選手と一緒に暮らしていて、選手一人ひとりの個性を把握している私でさえ手のひらから落っこちてしまっ選手がいるわけですから、臨時コーチの三根氏には大変な重荷を背負わせてしまったと思っています。すみません。

六月八日（火）

私の操る糸で動いている選手達なのでこんな試合になってしまいます。春季戦ではベスト四の中ではダントツに弱かった鶴鳴ですから進歩と言えれば進歩なのですが、問題はこれから。今回の結果を選手が「ふがいなかった」と捉えるのか、そう捉えたならばそれが自分への怒りとなって残り続けるのか。それがカギです。

【戦評 決勝リーグ】

長崎西戦（一一三対六一負け）

三根氏にベンチをまかせて試合を見てないからわかりません。長崎西が強すぎるのか、長崎女子が幼稚すぎるのか、が、長崎女子はちょっとでも歯車が狂うとこんな試合になるチーム力なんだということは間違いないなさそうです。

長崎商業戦（七四対七五負け）

バルーンカップ時点（五月八・九）では、長崎商業は川津・明瀬以外の選手たちも伸び伸び積極的にプレイするようになっており、県総体決勝リーグに期待を持たせた。しかし、本日の試合ぶりはバルーンカップとは別のチームの様であった。高校生のメンタルコントロールは難しい。

一方鶴鳴はやはり幼稚さが随所に出る。これが、一年経てば治る幼稚さであればよいが、一年経っても変わらない幼稚さであれば、鶴鳴にとっただけではなく国体チームにとっても重要な問題だ。奮起を望む。

純心戦（五四対六一負け）

全国レベルに届かない高校生というのはこんなに脆いものなのか：

文責 山崎 純男

二 ユリア

【光合宿】於 山口県光市スポーツ交流村

平成二二年〇七月十八日～二〇日 対戦 佐賀清和・佐賀少年・山口少年・鹿児島少年・日立笠戸

中村学園

試合数 十二本（二〇分×十二）

勝 敗 一勝十一敗

出場時間 岸上藤 一七八分・酒井 一八六分

赤島 一五二分・黒田 二七分・長田 二〇四分

福井 不参加・岸上桜一分・小林二〇分

久松 二二二分・林田 六分・川上 二〇七分

コメント

十一名連れて行って、実質試合で使えるのは七名。その七名も今回集まった強豪チームとまともにやり合えるのはひとりもない。みんな、他人事としてとらえるなよ。自分の何が役に立ち、自分の何があるの足を引っ張っているか真剣に考えろよ。

久松はディフェンスだけでなく、全ての場面で対応が遅れる。というより、何が起こりそうかを見つけてよとする強い意志が足りない。

川上はディフェンスリバウンドとブロックショットで貢献してくれるが、自ら得点を取りに行く意欲がない。こぼれ玉をたまたま拾ってシュートに結びつけるのは誰にでも出来る。守られてもそれをはじいて得点してこそ大黒柱だろう。

林田、あ、目を開いていても事が見えなければ先に進まないぞお。

二年生はみな、もっともっと自分自身を叱り、もっともっと自分自身を誉めなければ…。

追伸

右記五つのコメントは、新生生の久松・川上・林田の三人は当該年度最高のリクルートができたと思っており、これで三年間全国レベルを目指したチーム創りができると思っていたのに、三人とも中学時代には見えた意図が意外な弱点が見つかったので焦りが混じったコメントになった。

県内で勝てばいいという基準でチーム創りをすればいいのならこんなコメントを出すことも、選手を追い込み過ぎることもなく、もう少しバスケットを楽しむながら伸び伸びプレイだせることができたかも知れないが、そうはいかないところが鶴鳴バスケットに関わった者の宿命だ。

結局、久松は三年生の県高校総体の長崎西戦で前十字靱帯を切ってしまい。泣かず飛ばずのまま高校での

バスケット生活にピリオドを打つことになってしまったが、追い込み過ぎたことがケガ要因の一部になったのかもしれない。悔やみはしないが、そういう思いは今でもある。

【優梨亜】

平成二二年七月三一日。一年生のマネージャー林優梨亜がこの世を去った。林は、四月になってからマネージャー志望で入部してきた。が、彼女はほんの数週間体育館に顔を出したあとは部活動に来なくなった。こんなことは自主志願で入部してきた生徒には毎年あることなので気に止めてはいなかったが、ある日担任に「あの子どもどうしてる？」と聞いたら、体調不良で病院通いをしているし休みがちであるという返事が返ってきた。

この時点でも私は、身体的な理由による体調不良ではなく、林の体調不良はストレスによる精神的な問題だと捉えていた。世間では五月病と言われて一括処理されることが多いが、学校でも職場でも新年度が始まった四月から夏休みを越すまでの間にはよくある現象である。

七月になって私は担任に「どうあの子？」と聞いたら今度は入院しているという返事が返ってきた。私は「バスケット辞めると言ってます」という返事が返ってくると思っていたがそうではなかったので、彼女の体調不良について詳しく聞いてみた。が、甲状腺の機能障害らしいということしかわからなかった。そして七月三一日、林優梨亜逝去の情報が入った。

私は、甲状腺機能障害が命に関わる病気だとはどうしても思えなかった。がそれ以上の情報は誰に聞いてもわからない。八月三日の葬儀に参列して初めて彼女がこの世を去った原因がわかった。父親が謝辞の中で経緯を説明してくれたのだ。甲状腺機能障害には間違いなかったが、それが彼女の命を奪ったのではなく、その治療の途中で特殊なウイルスに感染し、そのために多臓器不全を起こしてしまったのが原因だった。

林は淵中学校出身。昨年突然の脳出血でこの世を去った後藤の後輩だ。しかもポジションも同じマネージャー。後藤と違つて林は、入部してすぐ体調不良になったので一緒に仕事をしたという記憶はない。しかし私は運命を呪った。同じ中学校出身のしかもマネージャーを二人も続けて……。神様のいたずらにはいじわるすぎる。

三 ハワイ

【ハワイ】

夏、アメリカ遠征をした。この年鶴鳴はアメリカ遠征をする年ではなかったが、徳島城北からの度重なる依頼で参加した。ハワイのバスケットボールチームとの交流は、平成一五年の六月十二日から十八日まで、HOOPS・IMUA（イムア）というミニバスチームからの依頼で日本での交流試合の世話をしたのがきっかけである。

私はHOOPS・IMUAの関係者の中に知り合いは一人もいない。ではなぜ交流試合の世話をしたのかというと、HOOPS・IMUAの保護者たちがこどもを日本に遠征させたいと思っていたところ、鶴鳴がしばしばアメリカ遠征をしているというのをインターネットで知って、HOOPS・IMUAの関係者も私に何の面識もないのに鶴鳴に接触してきたことから始まる。

この時、HOOPS・IMUAのチームは長崎のあと大阪・東京と廻つて成田から帰国することになっていたが、HOOPS・IMUAチームは、コーチも保護者も選手も「大阪も東京もキャンセルしていいからこのままずっと長崎に居たい」と言った。特別待遇でお世話をしたのではないが、長崎での交流がえらく気に入ったらしく、帰り際に「山崎コーチ、次回鶴鳴がアメリカ遠征をする時はアメリカ本土ではなく是非ハワイに来てください。お世話をしますから」と懇願された（一部第七章の説明と重複）。

鶴鳴は、三年に一回アメリカ遠征をすることにしており、翌平成十六年が丁度その年に当たっていたので

「あれほど懇願されたのだから一度ぐらいハワイに行つてやるか」ということでハワイ遠征となったのである。鶴鳴がアメリカ遠征をする時は国内の指導者やチームから依頼があれば連れて行つてやることにしている。過去、指導者個人では六人、チームとしては六チーム（中には複数回同行しているチームもある）が参加している。平成十一年にインディアナ州のエバンズビルに遠征した時に参加したのは五チームで総勢九〇人以上の大部隊になり、小規模校の海外修学旅行並の旅行になった。

徳島城北は同行の常連校で、平成十六年のハワイ遠征の時にも同行した。その時HOOPS・IMUAは前年に日本遠征をした時のお返しをしようというので張り切って、交流試合の相手チームを斡旋するのはもちろん、観光やパーティやショッピングなど、最高のもてなしをしてくれた。

庄巻はホノルル空港での出迎えだった。リムジンが三台ズラツと並んでおり、真夏のハワイなのに黒のスーツを身に纏つて黒のサングラスをかけた大男の運転手たちが、最敬礼をしながらドアを空け選手たちをクルマに招き入れてくれるのである。

徳島城北の富田先生はこれに味をしめた。で、「選手がアメリカ遠征をしたい。ついてはハワイがいいと言つてせがむんです。鶴鳴は今年アメリカ遠征をする年ではないと分かっていますが、先生だけ城北に添乗して貰うわけにはいかないでしょうか」と再三頼まれた。私は、自分だけ城北に帯同するのは気が進まないので鶴鳴の選手に聞いてみた。

「今年アメリカ遠征をする年ではないが、城北から依頼された。行きたい者は親と相談して申し出る」とすると十五名の選手が申し出てきた。それならツアーが成立する。というわけで臨時のハワイ遠征となったのである。

フライトスケジュール：

鶴鳴

八月〇六日（金）	福岡空港	出発	ANA一七〇二	午後二時二〇分
	関西国際空港	到着		午後三時二〇分
	関西国際空港	出発	JAL七八	午後九時二〇分
	ホノルル空港	到着		午前一〇時十五分
八月一〇日（火）	ホノルル空港	出発	JAL七七	午後二時二〇分
八月十一日（水）	関西国際空港	到着		午後五時五十分＋一日
	関西国際空港	出発	ANA一七〇九	午後五時〇九分
	福岡空港	到着		午後九時五〇分

城北

八月〇六日（金）	関西国際空港	出発	DELTA二七八	午後九時〇〇分
	ホノルル空港	到着		午前一〇時〇〇分
八月一〇日（火）	ホノルル空港	出発	DELTA二七七	午後一時三〇分
八月十一日（水）	関西国際空港	到着		午後五時二〇分＋一日

ツアースケジュール

八月〇六日	日本出発	ホノルル到着
	貸切バス観光	オアフ島
八月〇七日	バスケットボール友好ジャンボリー	
八月〇八日	ワイキキビーチ（水泳、お土産店めぐり）	
八月〇九日	アラモアナショッピングセンター	

八月一日　　ホノルル出発
八月十一日　　日本到着

ホテル
アストン　ワイキキ　バニアンホテル

【幕引き前兆】

九月二十九日のブログより

二六日の神村学園との合同合宿最終日以来ずっと不愉快な気分と怒りが蓄積していました。理由は、「鶴鳴は強くなったかもしれないぞ」と思わせるプレイがまったく影を潜め、無表情無反応なプレイが続いていたからです。

経緯を説明します。県総体以降私のアタマで思いつくことをすべて試みてチームの強化を図ってきましたが、夏休みが終わっても全く先が見えません。それが、九月五日のスクリメージで突然「え？鶴鳴はひよつとしたら強くなったかな？」という動きになりました。きっかけは私の檄に刺激されてディフェンスが積極的になったからでした。もちろんこの日に急に檄を飛ばしたからよくなったのではなく、六月一〇日以来ずっと強調してやってきたことがこの日に突然表面化したのです。

そうすると、走るしシュートは気持ちよく放すし、連鎖反应的に動きがよくなり、それが九月二五日まで続きました。そんな動きが二六日にパツタリなくなり前述のような状態になったのです。

二六日に私は「九月に入って、私たち少し強くなったんじゃないかな、とは思わなかったのかい？思っていたヤツいるだろ？」と質問したら全員うなずきました。二六日はそれ以上何も言わずにおしまい。ところが次の日もまた次の日もダメなのです。無表情無反応は変わりません。で、今日はついにキレてしまいました。「自らの努力で築き上げてきた結果を簡単に投げ捨てて何も感じないのなら今すぐやめてしまえーっ！」と言って三、四人の選手にビンタを食らわしたのです。

この歳（六八歳）になっても暴力でしか選手を制圧できない自分自身が情けなく、そんな自分に怒りさえ覚えます。怒りを覚え、自分自身を冷静に見つめ直してみようとしますが、選手のふがいなさを大目に見てやるほどの心の広さをまだ持ち合わせていない自分がより鮮明に浮かび上がってきて一層腹が立ちます。

一〇月〇五日のブログより

一〇月一日のブログに載せた空き缶放置。もう四日間もそのままです。今朝は駐車場でマイクロバスから降りて近辺でゴミ拾いをしている選手たちを集め、「この缶はなあ、四日前からここにあるぞ」と嫌味たっぷりに言いました。

本校では全生徒が道端に捨てられているゴミを拾いながら登校し、校門に備えられている分別ゴミ籠に捨てるという真心運動を実践しています。バスケット部の選手ももちろん毎日実践しています。寮のバスケット部員は毎朝私のマイクロバスに乗って登校するので、バスを降りた駐車場近辺でゴミ拾いをします。毎朝同じ駐車場で降ろすのに四日間空き缶のことを誰も気付かなかったので、それが悔しくてつい嫌味を言ってしまうました。

一〇月十三日のブログより

この一週間、週末の若葉遠征以外の日は一時間練習のみでした。中間テスト前だったからです。その中間テストが今日終わりました。通常の三時間練習が今日からまた再開です。ところが、雰囲気はドヨーンとしていて選手の目は腐ったサバ。途中、主力選手のうちの一人を学校敷地内から追放しました。それでも雰囲気は変わりません。夏休みが終わるまでずっとダメだったけど、九月に入って強くなったと選手たちの大半が自覚していたはずなのに。

はずなのに…の根拠は、選手同士の中で「選抜に行きたいねえ」という会話がなされていたということが、ある人を介して私の耳に入ってきたからです。もし試験勉強で疲れていたとしても、強くなったと自覚しているのならば中間テストが終わった今日は「さあ今日からまた頑張るぞ!」という雰囲気になるはずですね。それがドヨーンですから。

あれこれ考えていると眠れません。それでレンドルミンを一錠飲みましたが眠気が襲ってこないのです。で、アモバンをまた一錠追加で飲みました。それでもまだ眠れません。今日はこのまま夜が明けるのかなあ？

一〇月十四日のブログより

一昨日の続きの話になります。バスケット部だけでなく、寮に居る部活動の選手たちは毎朝私のマイク口バスで高校まで送ります。今朝も私は寮の玄関前にバスを止めて待機していました。するとA選手がゴミ袋を抱えて玄関から出てきました。でも、おはようございますの挨拶はしませんでした。たぶん、私が運転席で本を読んでいたのが合わなかったからだと思います。

バスで送る選手たちはみな、乗車する時は「おはようございます。お願いします」と挨拶をします。これは習慣になっています。ゴミを捨ててきたA選手ももちろんいつものようにあいさつしてバスに乗り込みました。私はこのことを学校に着いてすぐみんなに話しました。「たぶんA選手は、私と目が合わなかったし、私が本を読んでいたのであいさつを控えたのだろうが、バスのドアは開いていたのでおはようございますの声は車内の私に聞こえるはずだから、今日は乗車する時ではなくまずこのタイミングで一度挨拶すべきだった。たえそのあいさつに対しての私の反応がどうであつてもだ。こういう場面にこそその人間の本当の実力が出てくる。実力とは、状況判断力とか決断力とか勇気などのことだ」

一〇月十九日のブログより

真心運動のことを一〇月五日のこの欄で述べました。続きを述べます。今朝バスに乗せてきた選手を降ろして体育館への階段を降りていると、玄関の目の前の溝にでっかいビニール袋が落ちていました。私はバスから降りてすでに体育館の中に入っている選手たちを呼び集め「こんなにでかいゴミは、注意して捜そうとしなくてもフツーに視野に入るぞ」と言いました。

バスケット部は一人残らず真心運動をしながら登校しますが、この一例からも、ゴミを一個拾ったら「ノルマを果たした」という程度の自覚なのだろうということが推測されます。真心運動がホンモノじゃないということはバスケットもホンモノじゃないし勉強もホンモノじゃないのです。落語に小言幸兵衛という話があります。私はホンモノの選手を育てるために小言幸兵衛であり続けようと思います。

十一月二日のブログより

今日は県新人戦の二日目。ひどい試合でしたが心は静かでした。振り返れば十九日の夜から心が静かになり、イライラやモヤモヤが消えました。自己分析を試してみました。確証はないのですが、私の心と身体が現実を受け入れたのではないかと思えます。

わかりやすく説明しますね。それまでの私は選手たちに対して「俺が七ヶ月も鍛えてきたのだからこの技ができないわけがない」とか「こんなに言葉を選んで説明しているのだから理解できないはずがない」など、「はずがない」「や」「ねばならない」という思いばかりが強く、「かもしねない」「がなかったのではないかと思うのです」「はずがない」が強いと「お前やる気あるのかあ!」と腹が立ってきますが、「まだ理解できないのかもしねない」と現実を受け止めようとすると「じゃ、こんな例を出せばわかるかなあ」と、次のアドバイスを考えようと思えます。

今日の試合も、「叱っても仕方がないからこんなことをかけようか」と、言葉選びばかり考えていました。口調は激しくなることはあつてもアタマに血が上ることはありませんでした。自分で自分に「現実を受け入れろよ」と言い聞かせた覚えはないので、この自己分析が当たっているかどうかはわかりませんが、自分の中で何らかの変化が起きているようです。

平成二二年〇一〇月 ウィンターカップ予選三位 スタメン 岸上藤 福井 赤島 久松 川上

【案内文書】林田捻挫で出場なし

地区新人戦の報告とウィンターカップ予選の案内が同時になりますし、主戦力は地区新人戦もウィンターカップ予選も変わりませんから、試合の組み立て方やプレイのことについて新たにお知らせすることはありません。ですから個人的なことやその他のことについてお話しします。メンバー表をご覧ください。主戦力は変わりませんが、地区新人戦とは違う箇所があります。

尾崎二年 吉岡三年、# 村岡二年 上瀧、# 船津一年 福井三年、# 上村二年 泉田三年がそれです。そうです、三年生は全員イントリーなのです。ウィンターカップは三年生にとっては高校生部活動最後の試合。3年生にユニフォームを着せてやったら主戦力が削がれるというのならば話は別ですが、そうでなければこれまで下働きでチームを支えてきてくれた選手にはユニフォームを着せてやりたいと思うのです。

部活動の監督というのは指揮官です。規模は違っても、明治維新の元勳や太平洋戦争の指揮官と同じです。それならば私は、明治維新で言えば勝海舟でありたいと思うし、太平洋戦争で言えばインパール作戦の牟田口廉也中将では絶対にありたくないし、宮崎繁三郎少将（当時少将 後中将）でありたいと思っています。個人的なことに触れます。地区新人戦が終わってホッとしているのは川上と林田だと思います。少しは役に立てたという思いで…。これを契機に、この二人が殻を破っておとなの世界に一步踏み出して行くかどうかを見守って行きたいと思います。

福井については、周囲が彼女の危なさをカバーしてやれば彼女のよさ（スピードに乗ったら誰も押さえられない）が引き出せると思うってつきあっていくことが肝要です。その役割を担うのが岸上姉です。たのむぞお！

酒井！お前なあ常時スタメンで当然なのに、そろそろ巢から飛び出せよ！お前の顔を思い浮かべると常に出てくるのが鳥の巢立ちだ。卵から孵って親から餌を貰って大きくなって巢の淵で羽ばたいて「飛ぼうかな。でも怖いな」と、飛び立つのをためらっている。いつまで待たせるんだよ！

久松は目が肥えてくればいいだけ。赤島には何も言うことありません。一年のブランクでまだ少しスピード不足ですがそんなの関係ない。
追伸：明治維新がなぜ勝海舟かというと、伊藤も大久保も西郷も退廃した江戸幕府を潰して新しい日本を作ろうとした側の人間。勝は、幕府側の重鎮でありながら幕府を潰して新しい日本を作ろうとした人間。裏切り者とかタヌキおやしという批判は常につきまっていますが、その度量の大きさが私はすごいと思うのです。

【結果報告】

昭和四八年全国中学大会決勝、昭和五三年全国高校選抜大会決勝、平成三年浜松インターハイ決勝、平成七年福島国体決勝、平成八年山梨インターハイ決勝、平成十二年富山国体決勝、どれも私のありったけのエネルギーを使いましたが、今日の明誠高校戦はそのどれもを上回る知力と精神力を投入しました。試合の流れを作り、試合の流れを壊し、こっちの選手の個々の危なさを隠し、こっちの選手の個々の良さを引き出し、相手の選手の個々の良さをつぶし、相手の選手の個々の弱点を引き出す。その全てを私が仕切らなければ試合が成り立たなかったからです。

そんな現状ですから、次の長崎西戦は悲惨でした。私の手の届かないところで試合が動いていたのです。試合を観ていた人たちにとっては歯がゆい思いをする場面がたくさんあったと思います。すみません。歯がゆいというのを具体的な言葉で表現すると、プレイの選択の間違いや読みの未熟さや反応の遅さはもちろんのこと、ヘナツとかヒヨロツとかボケケツという場面が頻繁に出たことだと思えます。観ている人たちはこうした試合の時だけですが私はずっと選手と一緒にいて、毎日これを目の当たりにしているわけですからその歯がゆさは計りしれません。それを解消するために私の知恵を総動員してこの七ヶ月訓練してこれな

のですから…

その歯がゆさの証明が左手小指の骨折（二〇一〇年一〇月二十九日のブログ参照）です。さらに、明誠戦の私の脳力の消耗と長崎西戦の歯がゆさが私の身体を苛み、不整脈となって現れました。今日短大の研究室に戻ってから約一時間、それが頻脈へとエスカレートしました。頻脈は毎分一三〇〜一四〇程度ですが、これは五千歩走っている時の脈拍と同じ数値です。今、私の心身は極限状態だと思います。ですがそれも、この報告書を書いている途中で治まってきましたので、これから時間をかけて今後の訓練のことを考えようと思えます。へこたれませんが、がんばります。

【戦評】（長崎西戦57対93で負け）

一言で表現するなら大人と子供。プレイの読み、反応、学習、修正すべてにおいて大差。長崎女子が一、二年生主体で若いからというだけでないなあこれは。

文責 山崎 純男